

## 復旧と復興への心がまえ

災害で被害があれば、次への備えやこれからの生活再建のためにとりあえず復旧が行われ、復興について作業が実施されるのが通常です。ところで、復旧は前の状態に戻すこと、復興は一度衰えたものが、ふたたび盛んになる、盛んにすることという意味があり、復旧は原状回復、復興は新たな計画というイメージでとらえられているのではないのでしょうか。豪雨により堤防が決壊すれば、その場所に土のうを積んだり、鋼矢板を挿入するというような対策で補修されるし、排水が必要なところは大型ポンプでの作業が続けられ、重機等の搬入が可能な道路が確保されていきます。このように、復旧は、とりあえず生活ができる環境を確保するということですので、十分なものは不可能です。そして、この復旧の段階では、二次災害や新たな災害が懸念される中での作業になるので、とりあえずとはいえ、細心の計画で実施される必要があります。復旧が出来上がると、なんとなく安心・安全が確保されたように思えてきますが、実際には脆弱な状況であることを地域の方々は知っておいてほしいと思います。災害は、時間とともに風化するといわれていますが、どうも人には帰巣本能があるらしく、経験や履歴を忘れてしまって、同じリスクを背負うってしまうということになります。災害にあつたら、気象状況の特殊性だけでなく、そうなる地形や地質、土地利用といったことも考えて、同じような作為をしないということを次の世代へ伝えていくことが必要だと思います。

そして復興ということになりますが、一番に大事な基本は住民の方々の考え方になります。まず、自然災害に立ちする地域のリスクへの理解が必要になります。そのうえでの新しい地域づくりが必要となりますので、同じことを繰り返しても意味がありません。リスクを頭に入れて、災害は必ずいつかは起きるということでの判断になります。地域に長い間住んでいて、今回のような被害は初めて、先代からも聞いていないことは、今後の安全保証になるわけではありません。その上で、回避するのか、軽減策に投資するのかなどを考えていく必要があります。行政も、そのための資料を提供することは重要なことですが、ごり押しをしたり、早急に幕を引くようなことは避けなければなりません。

いままで、多く見てきた光景は、行政がコンサルタントに委託してプランを提出させて、住民の意見を聞くということをしてきました。たしかに、コンサルタントはさまざまな計画に豊富な経験があるのですが、限られた時間での作成になりますので、地域の文化、習慣には無知な場合も散見されます。復興後、さらに何百年と続く生活環境を、このせわしない期間に策定するというのも無理なこととはいえ、極力住民の意見や今までの生活を聞き取ることだけは必要な気がします。あまりにも、合理的な計画は利便性はよくても、居心地のよい住処になるかどうかは住民側にあると思います。復興プランは、最小の利便性と安全、安心な仕組みを配して、地域づくりは住民にという考え方をしていかないと、住民の生活意欲がなくなって、単なる寝る場所としかならないような気がします。地域でのコミュニティが醸成される場所があつてこそ地域防災にもつながると感じています。